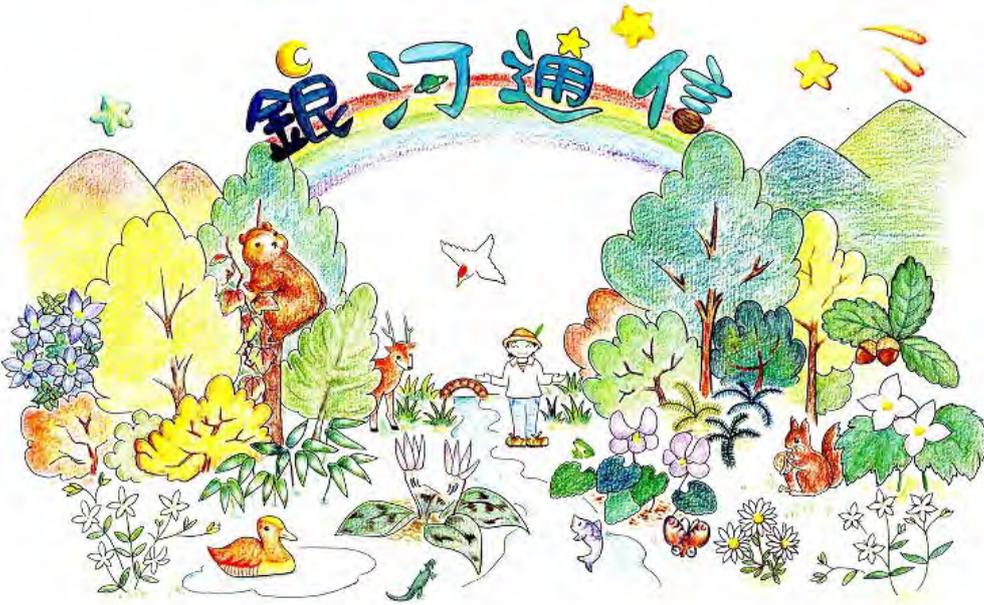


2012. 9. 15

No.173

編集・発行人 樋口みな子

E-mail minginga@agate
.plala.or.jp
メール配信希望の方はご連絡
ください。
郵便振替「銀河通信」
02740-7-56535
(郵送6号分1,000円)



野幌から初秋の便りです



9.12 我が家の庭にきたアカゲラ

今年の夏は厳しい暑さが続きました。お盆を過ぎるといつもならしのぎやすくなるのですが皆さまはお元気で過ごしてはいかがでしょうか？

私は、泊原発の廃炉をめざす会の活動を中心に、時間があれば山登りという生活に変わりました。以前なら、時間のある時

は映画にもよく行きましたが、この時間、事務所で仕事をしている仲間がいると思うと申し訳ないと思えて遠ざかっています。それでも原発NOに関する映画は時間を作っては見ています。

朝起きると、庭に野鳥がきていないか眺めるのが習慣になりました。友人がバードテーブルをプレゼントしてくれて、楽しさが増しました。今朝(12日)2階からノックするような音がするので、外に出てみるとなんと我が家の三角屋根の木を懸命につついてるアカゲラでした。(上の写真)街から消えたと騒がれた雀もたくさんやってきます。自宅近くにまだ草原が残っているからでしょうか？野幌森林公園に近いのでシジュウカラ、ヤマガラ、ハクセキレイなどの姿もあります。野鳥は庭のリンゴの木がお気に入りです。

先日、久しぶりに音楽会に出かけました。伊藤光湖さんのヴァイオリン・リサイタルです。昨年初めて知ったのですが、曲の簡潔な説明が嬉しく、バッハの無伴奏ソナタはヴァイオリンの音色が重奏的で、荘厳。20分にも及ぶ演奏にすっかり惹きこまれました



9.3 アカトンボが秋を知らせてくれました。

さっぱりとした飾らない人柄も魅力です。音楽を楽しむゆとりも大事にしたいなと改めて思いました。

与謝野晶子や、金子み

すゞ、茨木のり子の詩に作曲し、ピアノの弾き語りをするという「音楽詩コンサート」を続けてきた人が吉岡しげ美さんです。今年35周年です。歌にすると詩が生き生きと躍動し、心に響くのが音楽詩の魅力です。札幌のコンサート以来お目にかかっていませんが、機会があったら是非聴きたいです。35周年、本当に長い演奏活動、おめでとうございます。11月2日~3日、サントリーホールで、記念コンサートがあります。東京周辺にお住まいの方はどうぞ一度お聴きになって頂けたらと思います。

調布市の小さな居場所からスタートし、心病む人たちが、地域で元気に暮らせるようにと願い歩んできたクッキングハウスが25周年を迎えました。私も縁あって、長い年月、賛助会員として支えてきました。25周年記念コンサートが12月15日、調布市グリーンホールで開かれます。同時に写真集やCD文庫も出版されます。どこに住んでいても、地域で支え合って生きて行ける社会であって欲しいですね。

銀河通信も来年25周年です。「楽しみにしています」の読者に支えられてここまで来ました。ささやかにでも記念の会をしたいなと思っています。



9.4 雨上がり虹



9.4 雨の姿見の池(旭岳)

東日本大震災被災地「慰霊と支援の旅」と全国自然保護集会に参加して

日本山岳会の自然保護全国集会が尾瀬で開かれるのに合わせて、東日本大震災被災地の慰霊と支援の旅が企画されたので、是非この目で見たいと参加を決めました。

6月29日、新宿駅からバスは東北自動車道を、福島、宮城を目指して走りました。車窓から荒浜の被害を見、塩釜へ。毎日新聞の渡辺記者と、秋田や仙台から参加の会員を乗せて、塩釜市内を回って石巻に向かいました。

比較的被害が少なかったという松島は、津波で松が倒れたり、赤く変色していました。きれいな海水浴場としてにぎわった野蒜駅は、線路も電柱もなぎ倒され線路は海砂で埋まっていました。（右写真）

瓦礫は片づけられていましたが、人家が津波でさらわれた跡地と知ると、津波の大きさに圧倒され、声を失いました。草原になった一角に供養壇があり、亡くなった方が着ていた絆纏が無念さを無言で語っているようでした。家族がたむけた花が崩壊した護岸を見つ



仙石線野蒜駅は線路も電線も破壊されていました

自然保護集会は全国から133人の参加で開催。尾瀬高校の生徒も加わり、さまざまなテーマで、尾瀬の自然を学び、各地からの自然保護活動の報告がありました。

最初に小泉武栄さんによる基調講演「尾瀬の自然学」を聴きました。尾瀬の魅力を、本州最大の高層湿原、散在する地塘。多彩な高山植物、特異な動植物等、他に例をみないほど自然の多様性に富んでいると語り、湿原の中に森が続いているところがありヤチダモ、クロバ、ダケカンバ、ヤナギ、ズミ、ゴヨウマツなどがあり、多様な樹木が生えていると説



6.30 野蒜駅前の津波で流された跡地の供養壇

めます。月日がたてば、ここに人家があり、人が住んでいたことさえ忘れてしまうのでしょうか？悲しい光景に胸がふさがりました。海岸線には津波に耐えた防風林が見えました。

海は穏やか。堤防の上から石巻を遠望し猪苗代観光ホテルに向かいました。

ホテルでは「支援のタベ」が開かれ、ソプラノ歌手の山澤直子さんが福島を応援しようと「野口英世の母」などを歌い、劇団芸協などの一人芝居等で福島を応援しました。



6.30 車窓からの磐梯山

30日、猪苗代を後にして、尾瀬の自然保護集会へとバスで移動しました。車窓から秀麗な磐梯山が目の前に迫り、シャッターを押したのが左の写真です。父も福島に住んでいた頃、いつも眺めていたのだろうと懐かしい気持ちになりました。「お父さん、福島は震災と原発で変わってしまったけれど、山は変わらず美しかったですよ」と心の中でつぶやき、天国から、原発が無くなるよう応援を願ったのでした。



7.1撮影・柴崎徹さん 尾瀬の植物見本林で

明。北海道にはない樹木があり、ゆっくりと尾瀬を楽しんでみたいと思いました。

東電の敷地も含まれる尾瀬。今後の自然保護のあり方が注目されます。小泉さんは、従来通り東電には木道の整備、管理はしてもらいたいと話されました。

本題とは外れますが、日本山岳会の自然保護集会で「原発反対」「東電は、被災者に責任を持って」という発言が相次いだのは、初めてのことでした。

各地からの報告では、福島支部が、定期的に山に登り、放射能の測定をしていると発言。その地でやれることをしながら、放射能から身を守ろうとしている地元の苦悩が伝わってきました。



7.1 尾瀬のヒメシャクナゲ

7月1日のフィールドスタディは、尾瀬の一番短いコース、鳩待峠から山の鼻までにしました。最初から最後まで木道歩きに驚かされました。遙かな尾瀬と歌われ、全国各地から押し寄せる観光客で湿原の乾燥化を防ぐためにやむを得ないとしても背の高い木道は空中

散歩をしているようでした。東電のマークがやたらあり、自然保護に力を入れているぞとアピールしているかのようでした。

宮城支部のSさんの解説を聞きながら少人数で楽しく散策。高山植物の数は少なかったけれどヒメシャクナゲやタテヤマリンドウが可憐に咲いていました。短い時間でしたが楽しかったです。次回、機会があればアヤメ平を歩いてみたい。また至仏山に登ってみたいと思いながら鳩待峠を後にしました。

夕張岳新ヒュッテの安全祈願祭に参加しました

夕張岳のヒュッテが新しくなります。ユウパリコザクラの会員たちが交代で休みを取っては、組み立てて来ました。



8月18日、夕張岳ヒュッテ前で安全祈願祭を行うとのこと、大工仕事は出来ないけどこんな時ぐらいは行かなくてはと出掛けました。

書道家の比志星翠さん(上写真)が毛筆で木の看板に「夕張岳ヒュッテ」と書くと狭いヒュッテは拍手に包まれました。

夕張神社からいらした宮司の祝詞で祈願祭が執り行われました。コザクラの会員だけでなく、夕張市の職員、議員、関係官庁等40人の参加があり、水尾君尾事務局長が丁寧に、一人ずつ紹介しました。私は一会員ですが、北海道高山植物保護ネット前事務局長と紹介されたのにはびっくりするやら、恥ずかしいやら。全員の参加者のお名前と肩書きを、間違えずに紹介した水尾さんはすごい人だと感じ入りま



した。
新ヒュッテ建設には多くの登山者がカンパし協力しましたが、資金が足りなく心配しました。北洋銀行が助成金を出してくれるなどの協力があり、建設の目処が立ちました。秋には完成の予定です。

星の観測会

夫が星の観測を再開してから1年近くになります。眠っていた天体望遠鏡を調整し、すぐに観測できるようにリビングで大小3台が出番を待っています。

7月27日、日高町で開かれた日本山岳会の自然児学校で「星の観測もあったらいいね」とたまたまお誘いがあり、車に天体望遠鏡2台を積み込み夏の空で見える円形星座図を40人分用意して出



7.27夏の星座を解説

かけました。

札幌は晴れていましたが日高町に近づくにつれて曇り空。

日高町のキャンプ場で、澄生は夏の大三角や代表星座を説明し、早速天体望遠鏡を設置しました。

子どもたちは、お話よりも、大きな望遠鏡に興味津々。星は雲に隠れて見えなかったけれど、時折、顔を出す月を天体望遠鏡で交代で観察。月のクレーターが、くっきりと間近に見えるのに感激していました。

夫、澄生が天文少年になったきっかけは、ガガーリンが世界初の有人宇宙飛行に成功した頃だったようです。1962年に札幌にガガーリンが来た時、9才の澄生は花束を贈呈したそうです。そんなエピソードを最近になって知りました。

10歳の頃には、自分で作った簡易な望遠鏡で星を眺めていたという澄生。素晴らしい写真を撮って楽しむ天文マニアが多い中で、ひたすら、さまざまな光を発する星を探して楽しんでいます。

今年は金環日食があり、ちょっとした天文ブームですね。以前は遠くまで車に天体望遠鏡を積んで街の光が無いところを探しては星見に行っていました。自宅の庭でもかなりの星を見ること



ができます。夜空の星を眺めていると、世俗の悩みがちっぽけに思えます。是非あなたもどうぞ。

撮影・岡田秀二さん(上下共)

東日本大震災から1年半。ある新聞で歌人の木村雅子さんの歌を紹介していました。「いのちもつ星のかけらが生命なき砂塵に還るまでのつつましさ」「失ひしいのちかがやく残る人の心の中の銀河鉄道」
ふと夜空を見上げて、亡き人を偲ぶ季節ですね。

みな子の山旅日記

花パトロール登山で赤岳（2079m）と富良野岳（1912m）



日本山岳会道支部は、道から高山植物のパトロールの委託を受けています。「パトロール行こう」と声がかかり、7月7日～8日、大雪山系の赤岳と十勝連峰の富良野岳に7人で登りました。

7日は銀泉台から赤岳に登りました。10:10登山口を出発。丁度、花の見頃とあって



登山者は多い。ダケカンバの生える急斜面を登り、第一花園はまだ雪渓が残っていました。イソツツジ、アオノツガザクラ、チングルマ、エゾコザクラ等が満開で、雪渓を彩り美しい。奥の平の砂礫地にはコマクサが咲き、イワブクロ、メアカンキン



7.7 エゾコザクラ

バイ、ホソバイワベンケイなどもたくさん。ジンヨウキススミシも見ました。赤岳頂上には、東京からのツアー一行が賑やかに写真を撮っているところ。昨年も同じコースを登りましたが、今回は花の時期にぴったり合い、パトロール？もやりがいがありました。登山者150人。



7.7 コマクサ

7日の夜は、吹上温泉白銀荘のキャンプ地にテントを張り、みんなで焼き肉を囲みました。同じ場所で、各地の市役所職員の登山大会でたくさんのテントが並びました。

8日曇り。富良野岳登山口を6:00に出発。今にも雨が降りそうなので、早めの行動開始です。

安政火口下のヌッカクシ富良野川の涸沢を



緑の山・富良野岳



7.8 エゾノハクサンイチゲ

渡り、土砂を防ぐためにつけられた木製の階段登りがつらい。上ホロ分岐までは1時間。分岐を過ぎた頃から花が現れ始めます。チングルマ、エゾツガザクラ、チシマフウロ、エゾノハクサンイチゲ、ヨツバシオガマ等。しかし、山の眺望がなく辛い登りが続きます。ようやく肩分岐に出て、大休止。腰に違和感があり、いつもの調子が出ません。階段を登りきると、山頂までは素晴らしいお花畑です。ずっと雲の中にあった富良野岳頂上が

姿を現し、気持ちも晴れ晴れ。エゾルリソウは数輪あるだけでしたが、エゾツツジ、メアカンキンバイ、イワウメ、コイワカガミ、エゾウサギギク、ウズラバハクサンチドリ、チングルマの群落等お花に励まされて頂上に着きました。



7.8 イワウメ



7.8 ウズラバハクサンチドリ



7.8 斜面は色とりどりのお花畑

山頂 9:10

天気は午前中までしか持たないという予報だったので、肩分岐で休憩後は一気に下山。なんとか雨に遇わずに花パトロールを終了しました。



7.8盗掘で少なくなったエゾルリソウ

なだらかな雌阿寒岳（1499m）と雄々しい雄阿寒岳（1370.5m）



7.15雄阿寒岳頂上で
(撮影左右共・岡田秀二さん)

N登山教室で雌阿寒岳と雄阿寒岳に登る計画に乗りました。3年前までその教室のお手伝いをしてきた縁で7月14日～15日の2日間、登山を楽しみました。バスは高速を走り、野中温泉横の雌阿寒岳登山口を、11:55に出発。アカエゾマツの樹林帯を歩きます。



7.14 雌阿寒岳の噴火火口

地表が根張りで覆われていて足元には要注意です。ゴゼンタチバナやマイヅルソウが多かったです。二合目を過ぎるとハイマツ帯になり、トンネルをくぐったりと、変化に富みますが暑さにバテ気味。目の前が開けてくるが雌阿寒岳はみえず。以前登ったときは素晴らしい眺望に、歓声が上がったのだけど。雌阿寒岳の火口は地球の創生期を思わせ、いつも感動を覚えます。花は多くはありませんが、メアカンキンバイ、メアカンフスマがたくさん咲いていました。

長いバスの移動の後での登山でしたが、全員登頂でき喜びもひとしおでした。

15日は雄阿寒岳。私は初めて登る山です。阿寒湖畔の滝口登山口を5:15出発。太郎湖に出るところから、トドマツの森になりますが、暗くて蒸し暑さが続きます。どこまでも続く急登と一緒に登っている



仲間も音を上げ始めました。熱中症にならないように水を飲み、塩分を補給しながらの厳しい登山でした。眺望があれば気持ちも違うのですが、ずっと山は雲の中。3時間かかって5合目でした。7合目までは20分。な



7.14メアカンキンバイ

んだか得した気分。頂上には10:20 みんな頑張りました。雲の切れ間から雄阿寒岳頂上が見えたのも嬉しかったです。

苔むした登山道と深い森に抱かれた支湧別岳（1687.7m）



9.2 支湧別岳から大雪山系を望む
(撮影上下共・鈴木貞信さん)

山岳会の山行は忙しくなってきたからすっかりご無沙汰しています。たまには顔を出そうと申し込んだのが9月2日の支湧別岳でした。

1日に黒岳の花パトロールを終えて、白滝高原キャンプ場に着いたのは16時過ぎ。今回の企画と山行リーダーのHさんが、参



苔むした登山道

加者14人分の料理を担当。シイタケと海老のホイル焼き、ピッツァ、コーン豆腐、スペアリブ、野菜サラダ、そしてデザートまでその場で作るのを、女性陣が多少切ったり、盛り合わせたりは手伝いますが、ほとんど一人で準備し、手際良く料理して下さいました。Hシェフの料理が楽しみで道北の山行には必ず参加する人が

いるほどの人気です。味も申し分なし。

2日、キャンプ地から林道へ。行き止まりの砂防ダム地点が登山口です。登山口で山のトイレデーの啓発活動を行い6:45出発。急な作業道を歩き尾根に上がるとさらに急斜面で、最初から最後まで続くのですから、体が慣れるまでが厳しい登山でした。でも苔むした登山道が気持ちよく、トドマツとアカマツの針葉樹林帯が静かで美しく、暑さを和らげてくれました。水分をこまめに取り、塩分も補給しながら進みました。支湧別山頂からは360度の大展望に、今までの疲れが吹き飛びました。



撮影・杉本拓子さん

黒岳（1984m）で山のトイレデー

9月1日は全道一斉「山のトイレデー」です。山をいつまでも美しいままで楽しもうと毎年行っています。山岳会の4人で黒岳で啓発活動を行いました。



終了後は黒岳まで登山。厳しい暑さでした。

Books

スウィング・ジャパン

日系米軍兵ジミー・アラキと占領の記憶

秋尾沙戸子著 新潮社 1800円+税



惜櫟荘だより

佐伯泰英著 岩波書店 1500円+税

惜櫟荘とは、岩波書店の創業者岩波茂雄が1941年に建てた別荘でした。

著者は時代小説家ですが、その前はスペインの闘牛を撮る写真家だったという異色の経歴の持ち主です。私は時代小説といえば藤沢周平か山本周五郎ぐらいしかあまりなじみがないのですが、何故、著者が惜櫟荘に惹かれて入手したのか興味があり読み始めました。れきは柵（くぬぎ）の木のことだそうです。

著者は作家としての仕事が軌道に乗ると、熱海に仕事場を持ちます。しかもそこが、岩波書店の創業者、岩波茂雄が名建築家吉田五十八（第四期歌舞伎座も設計）に設計させた「惜櫟荘」の隣地であった奇縁からこの物語ははじまります。その「惜櫟荘」が事情があって岩波家の手から離れることを知り、買い取り、建物の保存のために解体・修復します。その変わっていく様子をつづったのが本書です。日々できあがっていく過程も読み応えがありました。

惜櫟荘は「江戸の粋を知る建築家」と言われる吉田五十八が岩波茂雄の海への思いを最大限に実現したところがすごいです。相模湾が眼下に見え、窓が一枚の絵になっているのです。この別荘で志賀直哉も原稿を書かされたそうですし、アンジェイ・ワイダ監督が訪れ、絵を描いて残したエピソードも語られます。若き日の著者が、スペインで、堀田善衛らと親しく交流した日々がつづられて興味深かったです。

時代小説を文庫本で書き下ろす、独自の方法で読者を獲得。180冊。累計4000万冊になるそうです。

惜櫟荘は老舗の岩波文庫が建て、異色の文庫作家が守ったといえます。自らを職人作家という著者がこの惜櫟荘を大事にする思いの深さに感動しました。



写真集 山に魅せられて

志田郁夫著 連絡先0234-33-6182
非売品

志田さんとの出会いは昨年、鳥海山に登った折、日本山岳会

自然保護委員会主催（東京）の観察会があり、山形の会員の別荘に集まった時でした。

謙虚な方で、鳥海山の写真を撮っていることはおっしゃらなかったのですが、銀河通信を通して交流しているうちに「山に魅せられて」という写真集をお送り頂きました。

戦後の日本ジャズ界の礎になった人々にスウィング・ジャズを教え、神様と讃えられた日系米兵だったジミー・アラキ（故人）のノンフィクションです。

太平洋戦争の勃発によって日系米人として強制収容所へ隔離されました。その数11万余人。多くは米国で生まれた2世たちで、17歳のジミー・アラキもその一人でした。

彼がジャズを覚えたのが高校時代を過ごした強制収容所だったこと。悲惨な目にあったとばかり聞かされてきた強制収容所は、実は日系人をアメリカ化するコミュニティだった事実も書いています。

いくつもの楽器をこなし作曲もしたジミーは、渡辺貞夫、北村英治、ジョージ川口、日野皓正、南里文雄、フランキー堺などのジャズメンを育てました。ジミーは占領期のGHQスタッフ時代に行った日本人分析で、日本の伝統文化に関心を持つようになります。戦後アメリカの大学に戻り、留学生として京大や東大で文学研究に進み、幸若舞を見つけたのです。

カリフォルニア大学大学院に提出した博士論文のテーマ幸若舞は、信長などの戦国武士に愛された舞のこと。私たちもあまり知らない芸能に関心を持ったジミーは、ジャズではなく、中世文学研究を極めて大学教授になりました。それでも音楽はいつもあり、「ある時はジャズ奏者、ある時は大学教授、鳴り響くハワイのアラキ」として朝日新聞に紹介されたりもしています。井上靖との交流も長く続きました。

晩年のジミーは離婚し、食道がん倒れ、1991年、66歳で亡くなっています。自身のアイデンティティを探し求めた人生だったと思います。

起伏に富んだ人生を丹念に追って、日米を何度も往復した秋尾さんの取材力に圧倒されました。

あとがきに酒田で生まれた志田さんは「日本海に浮かぶ鳥海山を眺めて育ったことや国鉄に入社後の19歳から酒鉄山岳部に所属し、山と写真に親しんだことが書かれています。

鳥海山写真コンクールで特選に選ばれるなど、数々の入賞を果たしています。

冬山の厳しい鳥海山、雪洞のようにぽっかりと空いた雪の穴から見える赤い小屋、ダイヤモンド鳥海などが印象的です。

志田さんが通い詰めた鳥海山の魅力がいっぱいつまった写真集です。

落日の雪原が美しくこの目で見たいと思いました。



高木仁三郎 セレクション

佐高信・中里英章（編）
岩波現代文庫 1360円＋税

3.11を機に市民科学者・高木仁三郎さんが生前予言したことが注目されています。

「核施設と非常事態」という論文があります。その中で原発の危険を、次のように鋭く指摘しています。「阪神大震災は、活断層に沿った直下型の地震ということととくに話題を呼んだ。それに対して、原発は一般に活断層のない場所を選び、しっかりした岩盤の上に建設することになっているから、阪神大震災の例は当てはまらない、というのが国や事業者側の主張であるが、活断層がない所」が選ばれているというより、「活断層がまだ知られていない所」という方が正しい。と述べています。泊原発に関してだけでも、周辺は活断層だらけだということが指摘されています。また「地震とともに津波に襲われたとき、そのような事態を想定して原発の安全や防災対策を論じることは、『想定不相当』とか『ためにする論議』として避けられてきた。そのような外部的事象によって引き起こされる緊急事態がどのようになり、それにどのように備えができるかできないかもきちんと、国や事業者の側が議論を提起すべきであろう」と指摘しています。17年前の高木さんの警告が、福島原発事故に生かされなかったことが悔しいです。

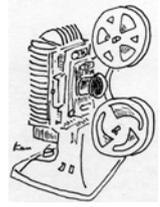
「市民科学者として」の項、「賢治にとっての『われわれの科学』とは何だったのだろうか」と自問し高木さんは『グスコブドリの伝記』を引き、「職業的教師であることを辞め、羅須地人協会という誰にもその意図すら明確でない場に無謀にも身をおいて、賢治がやろうとしていることの意味が、私にとっては、はじめて明白になった」と述べ、「私にとっての『市民』は、賢治の場合『農民』であったに違いないが、私はこの一文によって、原子力の仕事を、原子力産業の中や、象牙の塔の中だけのものから、いわば『濁らない(市民の)感覚』をたよりに市民のど真ん中に持ち出す決心がついた」と述べています。

岩波新書の「市民科学者として生きる」は愛読書ですが、「反原発、出前します」もあることを知りました。私が仕事と子育てに忙しかった頃、私たち市民が学び、出前で反原発を伝えようという運動をしようとしたことがあります。結局、学ぶ時間を確保することが難しく挫折してしまった苦い経験を思い出します。

原発を推進する立場の人も含め、多くの人に読んで頂きたい1冊です。

オレンジと太陽

英・豪 ジム・ローチ監督



19世紀からごく最近の1970年まで、イギリスは、親にも知らせずに恵まれない施設の子もたちを児童移民としてオーストラリアへ送っていました。その数13万人。

そこでは子ども達の人権は無視され、劣悪な環境での労働や、虐待もされていました。本作はこの真実を明らかにした実在の女性マーガレット・ハンフリーズの物語です。

演じるのは、演技派女優エミリー・ワトソン。事実を隠そうとする組織の、大きな力と闘いながら、家族と引き離された元児童移民たちのために彼らの母親を捜し出す姿をサスペンスフルに描きます。

マーガレットは家族と離れて、オーストラリアに事務所を構えて、児童移民だった人たちを支えながら、実態を調べ始めます。

児童移民を推進してきた教会からの攻撃も受けながら、果敢に闘う社会福祉士のマーガレット。

社会的テーマを監督したのはイギリスの巨匠ケン・ローチの息子ジム・ローチです。

映画で最も印象深いのは、かつて行われた不正義への非難ではなく一人ひとりの尊厳の回復を追求していたこと。静かにそれぞれの心に訴えかけひたむきに児童移民の立場になって行動するマーガレットの姿に感動しました。

この映画も力になって、2009年にオーストラリア首相が、2010年にはイギリス首相が、児童移民の事実を認め正式に謝罪しました。オーストラリアで大ヒットしたとか。映画の力ってすごいですね。

星の旅人たち

米・スペイン エミリオ・エステヴェス監督

サンティアゴ・デ・コンポステーラ。フランス～スペインの巡礼路を主人公が800キロの道のりを経て目的地を目指すことに。



出会う旅人達との交流あり、トラブルありのロードムービーです。まっすぐ続く道は人生そのもの。出会った4人がそれぞれの思いで旅し、旅を通して人生そのものを見つめ直していきます。せっかくのロードムービー。もう少し名所、旧跡が出てきて良かったかなとは思いました。

祝の島

瀬瀬あや監督



山口県上関町祝島。この住民500人の小さな島で30年も原発に反対運動を続ける人たちがいます。みんな高齢のおじいちゃん、おばあちゃん達。

祝島の人々の日常を追ったドキュメンタリーです。

映画会場の野幌公民館に行くと、なんと受付に座っていた若い女性が監督のはなぶさあやさんでした。

「ミツバチの羽音と地球の回転」(鎌仲ひとみ監督)も舞台は祝島でしたが、今回の映画は、海や農業で暮らす人々の生活が丁寧に描かれています。この美しい海で漁を続けるおじいちゃんやおばあちゃん。気の遠くなるような時間をかけて作り上げた棚田で米を作るおじいちゃんらの暮らしを見つめます。

彼らの言葉がいいです。「このきれいな海や山があるから生きてこられた」「原発がきたら海も山も死んでしまう」。豊かさって何だろうって考えさせられました。近所づきあい親戚づきあい、それらの人間関係に、亀裂を入れたのも原発だった。それが悔しいとおばあちゃんが言います。同時に今の社会が進む方向はホントにこれでいいの?と問いかけます。

はなぶささんのトークも良かったです。東京生まれ東京育ちのはなぶささんが、祝島に故郷のような懐かしさを覚えたと言います。「見た人が明日も生きよう」という力がわいてくるような映画が作りたかった」とも語りました。

30年も反対し続けられた強さが、このドキュメンタリーを見て分かったような気がします。

購読料をありがとうございます(敬称略) 2012.7.1~9.4

福田光子(秋田市)カンパ含む 小野純江(練馬区)カンパ含む 増子捷二(札幌市)カンパ含む 川口章子(船橋市)カンパ含む 大橋晃(札幌市) 秦野公彦(安平町) 新井喜美子(北広島市)カンパ含む 藤内英夫(札幌市)カンパ含む 三浦恵美子(旭川市)カンパ含む 大庭保夫(加賀市)カンパ含む 津村靖代(札幌市)カンパ含む 和田まさ子(豊浦町)切手 阿部一子(福島市)切手 津村靖代(札幌市)切手 合計36,000円と切手40枚は印刷と送料に使わせて頂きます。ありがとうございます。発行が遅れて申しわけありません。



ひろしま

関川秀雄監督

2012年8月23日 北海道民医連新聞

映画「ひろしま」を観ました。1953年の映画ですが、原爆地獄絵図の映像はリアルで、何万人もの苦しみや悲しみが克明に描かれていました。母や父を失い、孤児になった子どもたちのすさんだ生活、自分の働く工場で、兵器を作っていることに怒り、平和に目覚める姿。内部被曝の怖さも伝えています。福島原発事故で、被曝者をたくさん作ったことに怒りがわきました。広島市民9万人のエキストラが出演したという群衆が行進するシーンは、7・16さようなら原発10万人集会と重なり、胸が熱くなりました。日本中

ひろしま
友の会 樋口 みな子 (江別市)
の原発を廃炉にする運動に大きな励ましを貰いました。ぜひ多くの人に観て頂きたいです。



9.1撮影・杉本拓子さん 黒岳でシマリスがご挨拶

この夏、加賀や秋田から山の友人が来道。短い時間でしたが未知の山、親しんだ山の話で楽しかったです。各地に山の友人がいるというのも心強いです。どこの山もいつまでも美しいままで楽しみたいです。(み)

806-2012-7-20 (第三種郵便物認可)

日本山岳会報 山 806号

『北の花名山ガイド』 梅沢俊・著
北海道の山の魅力は原始の香りが残っていること、高山植物の豊富さにある。
著者は、『夏山ガイド』シリーズや『北海道の花』など、多くの著書をもつ。
本書は、北海道の代表的な花の名山を紹介したものが、読み物としても楽しい。それもそのはず、「たまには愛しい庭からとびだして、野生の花が持つ息吹を楽しんで欲しい」との願いをこめて『花新聞』の「道の山」に、『花新聞』から道南の太千軒岳まで45山を連載した。それを機に活用してもらいたいと加筆、写真も追加して1冊にまとめたのが本書だ。
3章からなり、1章は中央高地、道北・道東の山、2章は増毛・樺戸・夕張・日高の山、3章は道央・道南の山の「花の楽園」となっている。45山の季節ごとの花の見所交通アクセス、詳細コースマップも

ある。こんなに親切に紹介してあると、盗撮されないかと心配になると。私と梅沢さんとの出会いは十数年前。夕張岳やアポイ岳、大平山などで大量の高山植物が盗撮されたのを機に、北海道高山植物盗掘防止ネットワークが発足。全道各地の山岳団体や市民団体が結束しようとして立ち上がった時だった。日本山岳会北海道支部も加わった。梅沢さんは全道の山をくまなく歩いて、高山植物がなくなっていく現状を誰よりも知っていた。毎年開催される「高山植物をいつまでも」市民フォーラムでは、梅沢さんの素晴らしい花のライドと軽妙な語りかけで、たくさんの方が会場を埋める。

本書を開いて、まず選りすぐりの写真の数々に目を奪われる。文章には、梅沢さんと一緒に花を愛でながら歩いているような臨場感がある。そして、厳しい自然環境でけなげに咲く花たちに励まされながら、いつのまにか頂上にとだり着く。私も同じ山を辿っていたのに、見逃していた花、名前も分からなかった花が多くあった。次はこの本をザックにしのばせて登りたいと思う。
また、梅沢さんはこれまでにたくさんのお花を発見している。リシアザミ、ヒダカアザミ、マンゲレイジンソウ、リシリアザミなどだ。リシリアザミ発見の時は、天声人語でも紹介された。どんなに地味な花であっても丹念に観察してきたからこそ、数々の新種発見につながったのだと思う。
さらに、「その土地、場所の環境に応じてそこにふさわしい植物がある。そんな自然の美しさに惹かれます。地味が目立たないものにも美しさを見つけて楽しむのも」と語っている。地味な花にも心を寄せて紹介しているところが素敵だ。
チロロ岳ではヒダカレイジンソウ(新種)が旭岳と羅臼岳でエゾヤマアザミ(仮称)も紹介されている。私が、自分の花と決めているミツモリミミナガサも掲載されていて嬉しかった。
ガイド本はたくさんあるが、北海道の高山植物の魅力や文と写真で表現した本はそう多くはない。この本を片手に、北海道の花名山をぜひ辿っていただきたいと思う。(樋口みな子)

日本山岳会「山」2012.7月号に掲載